



Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticano の転載許可済  
©1980 精道教育促進協会(会誌)三二・三四五二芦屋市船戸町12-6

# 教皇様の叢

すべての源である

## 夫婦の愛

至聖なるイエズスのみ名教会にて

### 家庭と家族

(…)子どもが生まれると、かならずひとつの家庭が生まれま  
す。イエズスがベトレヘムでお  
生まれになり、そして人間の歴  
史に唯ひとつ、ほかに例のない  
「家庭」が生まれました。この  
「家庭」のなかで、神の御子は  
世に生まれ、おおくなられ、  
育っていかれたのですが、その  
御子自身ごもり、お産みしたの  
は、処女なる聖母であり、同時  
に、そもそも初めから、ほん  
とくに父親らしい心づかいが、  
ヨセフの手にゆだねられていた  
のです。ヨセフは、ナザレトの大工でしたけ  
れど、ユダヤの法からすればマリアの夫、聖  
霊の御意向からすればマリアの立派な配偶者  
でありました。そして、花嫁の神秘的な母性  
を、まことに父親にふさわしいやりかたで、  
守護したのでした。

(…)この「家庭」の歴史は、福音書のいく  
つかのページに、簡要に記述されています。

わたしたちは、この家族が暮  
らしていくなかでおこった事件  
のうち、ごくわずかばかりを、  
知っているにすぎません。しか  
し、そこから受ける教えだけで  
十分でしょう。そこには、あら  
ゆる家庭生活が基本としている大切なものが、  
含まれています。それがなんであるのか、し  
めつけてもいるのです。父として、母とし  
て、また一般に親として、子どもとして、家  
庭のなかで暮らしていくとはみな、その大  
切なことのために、召されているのです。福  
音がわたしたちに教えているところは、き  
わめて明解です。すなわち家庭のもつ教育的  
な側面にほかなりません。「イエズスはかれ  
らとともに下り、ナザレトに帰って、二人に  
したがって生活された」(ルカ2・51)

#### だれのために子を育てるのか

この服従の気もち、人間として家庭におけ  
る年長者のふるまいにならない、それを受け容  
れようとする従順さ、覚悟が、子どもたちや  
わか人びとには必要です。イエズスもまた、  
このように「したがって」おられたのです。  
そして親たちは、みづからのふるまいのこと  
ごとくを、子どもがそれに「したがう」のだ  
という点から、律さねばなりません。子ども

たちは、人間にふさわしい行動としてその模  
範にしたがおうと心がけているのです。これ  
は親としての責任のうちでもことに注意を要  
するところですが、人間に対する責任なのです。  
いまは幼く、やがて成長していく人間、神が  
親に直接ゆだねたもうた人間に対する責任な  
のです。親はまた、イエズスが十二歳のとき、  
このナザレトの家庭におきたすべてのことを、  
こころにとめておかねばなりません。ナザレ  
トの親たちは、その子を、自分たちのために  
育てたではありません。その子じしんのた  
め、その子がいつれ引き受けねばならぬ仕事  
のためなのです。十二歳のイエズスはマリア  
とヨセフにお答えになりました、「私が、私の  
父の家にいるはずだと知らなかったのですか」  
(ルカ2・40)

#### 家族が守るべきもの

人間のもっとも根本的ともいえる問題は家  
庭とかかわっています。家庭は人間にとって  
第一義的で基本的な、なにをもっても取って  
代えることのできない共同体です。「社会に  
おける第一義的な生き生きとした細胞である  
という使命は、神ごじしんが家庭にあたえら  
れたのである」(「信徒使徒職に関する教令」)  
と第二ヴァティカン公会議でも主張されてい  
ます。このことをも特に証したいと願ってい  
るので、教会は、降誕節のあいだ聖家族の祝  
日をいわうのです。だいたいなものなかに、  
それを犯すと道徳の面で測り知れない害をも  
たらすような基本的なものがありません。す  
なわち、そうした基本的な価値が家庭のなかには含ま  
れていることを、教会はおもいださせたいの  
です。物質的なもの見かたや「経済社会的」  
見かたが、キリスト教の道徳原理、ときには  
人間としての道徳原理をさえしのぐ力をもっ  
ていることがあります。そんなとき、遺憾の  
意をあらわすだけでは足りません。さきに述

べた基本的な価値を執拗に頑固に擁護しなけ  
ればならないのです。その価値をふみにじれ  
ば、社会に対し測り知れぬ害をもたらす、結  
局はそれを人間にまでおよぼすからです。人  
類の歴史のなかで、さまざまな国が経験した  
ことを見れば、この時代わたくしたちが経験  
したところも同じですが、次のようなつらい  
真理をあらためて確認できるようにおもいま  
す。つまり、家庭が決定的な役割をはたす人  
間存在の根本的な領域では、ほんとうに大切  
な価値のあるものを、破壊するのはたやすく、  
築きなおすのは非常にむずかしいことなのだ  
という真理です。

#### ひとのなうち

ほんとうに大切な価値とは何でしょうか。  
この問いに適切な答えをださねばならぬとす  
れば、すべての価値をたがいに規定し条件づ  
けるような、価値のだじさの順位表せんた  
いとその体系をしめさねばなりません。し  
かし、簡潔な表現をこころみ、こう述べる  
ことにしましょう。ここで問題になっている  
のは、「夫婦愛」に含まれるふたつの基本的な  
価値なのです。はじめのひとは、人間の価  
値であって、それは、死にいたるまでたがい  
に絶対的に忠実でありつづけようという態度  
にあらわれます。夫の妻に対する、妻の夫に  
対する忠実さのうちに表現される人格の価値  
です。この人間が有する価値は、夫と妻、相  
互の関係のなかであらわにされるわけですが、  
この価値を承認するならば、ついでまた、あ  
たらしい生命の、つまり胎内に宿った最初の  
一瞬からの子ども的人格の価値にも、敬意  
をはらわねばなりません。

#### 神に感謝を

教会は、家庭に対する神のみ旨と関係ふか

いこのふたつの基本的な価値を守っていかねばなりません。それは決して忽せにできない義務なのです。このふたつの大切なものを守ることは、キリストによって、教会に任せられたのであって、それについてはなんの疑いもないほどです。同時に、このふたつの価値は自明なもので、人間ならば誰でもわかることなのです。それを守る教会は、真の人間の尊厳の代弁者、人間にとって、家庭にとって、国家にとっての善の代弁者であると、みずから任じているのです。

たしかに、異なつたかんがえかたをする人びとすべてに対しても尊敬の念を忘れてはなりません。しかし、客観的かつ公平に見ても、だれであれ夫婦の忠節を裏切るひとや、母の

胎内に宿った生命を引きだし打ち砕いてもかまわないとおもうようなひとのことを、ほんとうの人間の尊厳にふさわしいふるまいで貫しているひとなどは、とうていおもしろくないでありましょう。したがって、そのような行ないを提案したり、容易にできるような行ない、許容したりするようなら、もろくろみによって、人間が客観的にしあわせになり、道徳的にしあわせになるなどという考え方は、みとめられません。人間の生活がほんとうに人間らしくなり、ますます人間にふさわしくなるなどとは、みとめられないのです。そうしたもろくろみによって、もっとよい社会を築くことができるのは、だれも承認しえないであります。

### 偉大なる使命

# 司祭のほまれ

『世界は司祭を必要としている』

五月三十日、  
ノートルダム大寺院。

司祭職における兄弟のみなさん。

(…)よろこびと希望にみたくされて司祭としての生涯を歩むためには、司祭職のみなもとに戻らなければなりません。世間が司祭の役目、身分、アイデンティティを決めるのはありません。それらを決めるのは、キリストであり、教会なのです。キリストはわたしたちを友として選んで司祭職を与え、わたしたちがひとりの仲介者キリストのみわざにあずかって実りをもたらすようにとお望みになったのです。キリストの神秘体である教会は二千年の間、司教と司祭、助祭が教会内でしめる場、絶対に必要な役目を示してきました。

フランスの大勢の司祭方は、教会にとって模範、わたしたちにとっては黙想の尽きぬ

源でありました。みなさまがたは、模範であり黙想の源である大勢の司祭がたの後継者であるという幸福を得ておられる。聖フランシスコ・サレジオ、聖ビンセンチオ・ア・パウロ、聖ヨハネ・ユード、聖ルイス・マリア・グリニオン・ド・モンフォルト、聖ヨハネ・マリア・ピアンネ。さらに、私がアフリカでその宣教の裏りを見て感嘆せざるをえなかった、十九、二十世紀の宣教師たちのことが思い出されます。確かにこの聖人たちの霊性は時代の申し子的な要素がみられる。しかしその内的なちからはいつの時代においても同じであり、おのおのの聖人の特徴は、わたしたちが営むべき司祭生活の数ある模範をさらにゆたかにしてくれます。できるならば、せ

ひととアルスへ巡礼したいと思う。アルスの主任司祭は、人々の回心のために祈りとつぐないに身をささげる司祭職の遂行およびその聖性という点からみて、どの国の人々にとっても比類のない模範であるからです。(…)

今夜わたしはいわば高間ともいふべきこの名高い場所で行くつかの勧めをしめしたいと思ひます。

### 司祭職を信じよう

まず第一に、司祭職を信じてください。こんにち、ある司祭たちを落胆させたり、その心に動揺をもたらせたりすることがらについてはよく知っています。数多くの分析や証言は現実の諸困難を強調しています。わたしはこの事実を心にとめておられると言えここですべてを数えあげようとは思いません。叙階を受けるひとが少ないという事実についてはよく考慮しています。にもかかわらず、みなさま方に申しあげたい、しあわせであってください。司祭であることに誇りをもってください。

洗礼を受けた人はすべて司祭的な民を構成している。全生涯を神にささげ、生き生きとした信仰を保ち、唯ひとつのいけにえであるキリストと一致するということはすべての信者の義務であります。公会議はこの点を思いおこさせてくれました。しかしそうであるからこそ職位的司祭職を受けた私たちは、信徒が共通の司祭職の何たるかを知り、それを実行に移すことのできるよう手をかさねばならぬのです。司祭であるキリストに同化したのは、頭であるキリストのかわりを勤めるためです。人々のうちから選ばれたにしてもわたしたち自身はあわれなめしつかいにすぎません。しかし、新約による司祭は、欠くことのできる偉大な使命を帯びています。聖ならしめる御方、仲介者キリストの使命でありますから、全生涯、全存在をことごとく献げな

ればならないのです。

司祭が不足するような事態を前にして、教会が手をこまねいているなど許されません。神の民が円熟すればするほど、またキリスト信者の家庭と信徒が多様な使徒職においてみずからの役目を引きうけることができればできるほどなおのこと、キリスト教的生活にいのちを与えるために、司祭が必要となるのです。別の面からみますと、世界が非キリスト教化されればされるほど、まったき信仰が不足すればするほど、なおさら、キリストの深い奥義を証すためにすべてをなげうつ司祭が必要になるのです。以上はわたしたちの司祭としての熱意を支える保証であります。このような展望のもとに全力を傾けて祈り、生活の模範を示すとともに司祭と助祭の重要さを熱心に訴え、その養成に努力することによって、召しだしたを奨励しなければなりません。

### 司祭のほまれ

神のみ旨によってキリスト・イエズスの使徒であるわたしはかさねて申しあげたい。フランスの司祭の間に深く根をおろしている使徒職と宣教への熱意をもちつづけてください。とくに、ここ三十五年の間、大勢の司祭は現代人の生活のただなかで福音を宣べ伝えんとする望みをすて去ることができませんでした。知識人であれ労働者であれ、「第四世界」であれ、あるいは教会からは遠くへだたつた人々、教会との間が壁でへだてられていたところ、人々々々であれ、とにかくあらゆるところで福音を宣教したいという望みを燃やしてきたのです。(…)みなさま方が司教方と一緒に考え実行しておられる司教的配慮はみなさま方の誉れであります。願わくはその努力が継続され、また浄化されますように。これが教皇の願ひであります。よき牧者としての熱意を有せずには司祭になることなどできませんか。

# 説教・講話・書簡等の抄記

よき牧者は、信仰や信心のわざから遠く離れていて人たちに心を配る。それなら、信者の群全体を集め、糧を与えるべく配慮することはない。これは教えきれないほどの主任司祭や助任の方々の日々の司牧が証明しております。

## 恩寵の分配者としての司祭

以上のような司牧・宣教的展望を眺めて、みなさま方の聖職がイエズス・キリストの使徒、イエズス・キリストの司祭にふさわしいものでありますように。なんのために叙階されたか、それを決して忘れないでください。みなさまは人々を神的な生活に進歩させる役目を果たすために司祭になられたのです。第二バチカン公会議は、人々の生活に無関心であってはならないと教えましたが、それと同時に、この世の証人というよりも永遠の生命の証人、恩寵の分配者たれと要求しています。

## 福音宣教の源としての「聖体」

みなさまは神のみことばの奉仕者となられましたが、それはみずから福音を宣教し、人々にもそれができるような訓練をほどこして、信仰、それも教会の信仰を、人々のうちにめざめさせ育むためなのです。みなさまは聖化するというキリストの仕事の協力者として、つねに自分の生涯を霊的ないけにえとしてさげらるよう信者に教えなければなりません。とくに、「福音宣教のみなもと、頂点として」のご聖体においてそうするよう教えるのです。司祭職における兄弟のみなさん、細心の注意を払って、ご聖体の奥義にふさわしい仕方では秘跡を祝わなければなりません。これについてはわたしの最近の書簡に書いた通りであります。ミサ聖祭における司祭の態度をみて、

信者の方々が神の聖なるおん方キリストと親しく交わることができなければならぬのです。ご聖体の奥義をわたしたちにゆだねたのは教会ですから、教会がご聖体の祝い方を指示するのです。司祭は信者の方々に生活全体を祈りの心でみたまう教え、秘跡にあずかる準備をさせる。わたしはとくに告解の秘跡、ゆるしの秘跡について考えています。キリスト信者が回心するために最も大切な秘跡であるからです。司祭は信仰の教育者として、良心の教師として次のような点で信徒を導かねばなりません。すなわち、キリスト信者それぞれが福音の教えに従って誠実な愛徳を積極的に行い、それがそれが受けた召しだしを深めること、日々のできごとのなかに神のみ旨を読みとること、人々を集め、人々を導く宣教的キリストの共同体のうちで、それぞれ自分の義務を果たすこと、キリスト教の信仰に則って社会における責任をはたすこと。求道者、受洗者、堅信をうけた人、既婚者たち、修道者や修道女、個人的あるいは会として、いづれの人々も本来あるべき生き方ができるためには、司祭のはたらきが必要なのです。

## 司祭の父である司教

司祭は全力を傾けてキリストの神秘の霊的成長をめざさなければなりません。どのような奉仕職や宣教をまかされていてもこの点では同じであります。これこそみなさま方の役割であり、この役割こそ司祭の大きなよるこびと、大きな犠牲のみなもとなのです。みなさまは「司祭として」、あらゆる人々のため、あらゆる問題に対処するために選ばれました。みなさまは司祭としての主体性を保持されますが、この主体性があれば、叙階の目的であるキリストへの奉仕をまっとうすることができまます。司祭の人格は人々にとって、生きていなければならない、その意味から、司祭の生活

を俗化させてはならないのです。

司祭職は、信徒とは明白に区別されていますが、司教職とは密接な繋がりをもって、叙階と布教辞令により司祭は自分の品級に応じて司教職に参与します。この点こそ、司教に対する責任ある自発的な従順および司教との賢明で信頼にたる協力の基礎であります。司教は司祭の父であって、司教なしに司祭が神の教会を建設することはできません。司教は司牧における責任を統一しますが、それはちょうど教皇が普遍的教会における一致を確立するのと同じです。同時に、みなさま方司祭と共にそして司祭のおかげで司教は、公会議が詳しく説明した三重の使命を果たすことができます。ここに、みのり多き交わり・一致がみられます。この一致は、実際面での交わりを示すだけではなく、教会の奥義の一面であって、とくに司祭団において強められるものなのです。

## 司祭同志の「秘跡的兄弟愛」

司教との一致は司祭同志の一致と切りはなして考えることはできません。キリストの弟子は全員、互いに愛しあうべしという命を受けています。司祭について公会議は秘跡的兄弟愛とまで言っています。みなさまは一つのこと、すなわちキリストの司祭職に参与しておられるのです。ところで、一致はまず真理における一致でなければなりません。司祭は一致の基礎を確立しますが、それは次のような方法によってなのです。すなわち、信者が種々の教えに押しながされないように教会が教える真理を勇敢に証すことによつて、また教会が定める規則に則つて聖務に関するすべての義務を果たすことによつて。そうでなければつまつぎと分裂の原因になってしまうことでしょう。

使徒職における一致がなければなりません。

互いに尊敬し合い、互いに協力し合つてはたしていくように、種々異なりかつ補い合う使徒職に召されているのです。兄弟的愛の分野でも一致は必要であります。だれも兄弟である司祭をさばくべきではありません。はじめから不忠実であると決めてかかったり、批判したり、中傷を言ったりすることは赦されないので。イエズスはフアリザイ人のそのような態度を非難されました。司祭間の兄弟的愛がもとにあればこそ、教会を建設し、その証人となることもできます。公会議が教えるように、司祭は信徒を一致へと導き、信者の共同体にあつてだれひとり他者者であるかのように感じることをないよう努めねばなりません。分裂の多い世界、一方的で突然の決定が多くなされ、方法も排他的であるような世界にあつて、司祭は和解と一致を確立するために召しだしを受けているのです。

## 司祭職のみのは聖性から

以上すべてがイエズスの聖性と密接につながっていることはわたしたちの経験がしめす通りです。聖性こそわれわれの果たすべき聖務をみりあらしめるために最も大きな貢献をする要素です。わたしたちは永遠の司祭キリストの生ける道具であります。この道具としての目的を達するためにとくべつの恩寵を受け、神の民の善のために、わたしたちがこの世でその代理をつとめる御方の完成を目指すのです。とくに聖務に関する種々の行為そのものが司祭を聖性へと導きます。観想の内容を伝える、成就すべきことに努力する、ミサ聖祭においてみずから完全に捧げる、教会の祈りにおいて教会のためにわたしたちの声を貸す、キリストの牧者としての愛を自分のものとするなど、これらすべては司祭を聖性へと導く行為なのです。

司祭の独身は、主のお召しになった仕事に

# 不変の教え

すべてをささげていることを表します。キリストに捕えられた司祭は、「他人」のために生きる人になり、天の王国のためならいつでもどこでも働く用意がある、そして、二分されていない心はキリストにおいて父性をうけることができるのです。

## 来て私に従いなさい

それゆえ、イエズス・キリストご自身に対する愛は、主のみことばの黙想、役務に関する祈り、なかでも毎日祝う聖なる犠牲、教会の勧めを守りつたてゝ「ミサ」によって、日毎につよめられねばなりません。「来て私に従いなさい」というあの神の最初の呼びかけ、その召しだしを得たときの直観をよるこびにあふれてたえず記憶しなければなりません。わたしはみなさんに希望をおもなさいとまねきたい。「日々の労苦と暑さ」をになつておられることは知っています。それは大きな功徳のもとです。とくにこんにちのような不信仰の時代において内的困難、心配の種をたくさん列記することもできません。

## 成長させるのはキリスト

第一にして最も重要なこと、それは信仰の問題です。キリストが聖とせられ、つかわされたことを信じていますか。キリストが我々のうちにお住みになっておられること、そして、この宝を土の器のなかにもっているゆえ主のご慈悲が必要であるとしても、わたしたちは人々の善のために主の聖務者とされたことを信じていますか。わたしたちが主のお仕事に手をかしますれば、わたしたちを通して

て実際にお働きになるのは主キリストであること、霊に従って苦勞を重ねつつ種まきをするれば、種を成長させるのはキリストであることとを信じているでしょうか。とくに、無償で受けたたまのをもう一度活き活きとさせることができるなら、キリストは我々と共に働き、また後をつぐべき司祭の召しだしを送ってくださることを信じているでしょうか。神がわたしたちの信仰をましてくださいますように。

教会全体に希望を広げようではありませんか。ある人々は苦しみ、ある人はいろいろな面であつて困っています。またある人はわが世の春を謳歌しています。「なにを恐れているのか、信仰のうすい者たちよ」(マテオ8・26)というキリストのみ声にいくとも耳を傾けなければなりません。主のためにすべてをささげる人、日々キリストにみずからをささげる人であれば、キリストのおん助けを受けなければなりません。

## 聖母は、司祭につきまとい、守る

(…)マリアを母と呼びかけるのはまず私たち司祭でなければなりません。聖母は、私たちがキリストから受けた司祭職の母であります。私は聖母にみなさまの聖務を委ねます。みなさまもご自分の生涯を聖マリアに委ねてくださるようお願いしたい。聖母マリアが初代の弟子たちをお守りになったように、みなさま方につき従い守ってくださいますように。カナにおける最初の出会いが司祭職の第一歩を踏みだしたときを思いおこさせてくれます。そのカナから、司祭の生涯を示す十字架上の犠牲、さらに、聖霊をいよいよ心待ちにまつペンテコステにいたるまで、聖霊の花嫁である聖マリアが、司祭につきそい守ってくださいますように。最後に、アヴェ・マリアを唱えてこの集いの結びにしたいと思います。(…)

(…)君たちは生けるキリストを信じており、心には恩寵を受けています。典礼の侍者役を果すことによってキリストに仕える心構えもありません。イエズスはとくに復活祭の間ご自分がほんとうに復活されたことを弟子たちにお示しになりますが、君たちは侍者の役目を果すことによってキリストのすぐれた方に居ることができるとは、(…)天にお昇りになったイエズスは今も教会の秘跡、なかでもご聖体の秘跡のうちに現存し、働いておいでになります。君たち侍者はそのキリストに親しく近づき、榮譽と幸福を得ているのです。

## 侍者の役割

キリストのみ名において聖務を果す司祭のそばで、君たちはご聖体の奥義の偉大さをより一層はつきりとしめす役割をこなしています。(…)侍者は、祭壇に近づく司祭につき従い、司祭のかたわらで祈り、聖なる犠牲に必要なものを司祭に手渡しします。聖務を受けているわけではないけれども、侍者は侍祭(アコリト)と同じような役目を果していると言えるのです。(…)同じことは、奉納行列に加わる人々についても言えるでしょう。供物はある意味で共同体がささげる神への犠牲を象徴するもの、言い換えれば、聖体祭儀においてささげられる霊的な犠牲であつて、そのなかには主の御体と御血に変わるパンとぶどう酒が含まれているのです。

以上のような役目はよく準備したうえで果さなければなりません。典礼をよく理解するだけでは不十分です。色々な方法で、キリストと教会を証すことのできるよう努力しなければならぬのです。侍者の役目をよく学び、そしてよく果すということは、祈りと使徒職に努力を傾ける君たちの仕事です。しかも、

# 侍者の諸君

## 主に耳を傾けなさい

そのような仕事は教育的な意味をもっているのです。

## 主に聴き入りなさい

(…)司祭はご聖体をはじめ他の秘跡をキリストのみ名において授けます。君たち侍者は司祭のこの聖務にあずかるのです。ところで君たちが望む司祭、神の民である教会が必要とする司祭の数は充分と言えてしまうか。君の国が司祭の召しだしをどれほど必要としているかはよく知っていることでしょう。私の言葉に耳を傾けてくれる少年たちに言いたい。ひよっとするとイエズスは、君たちを自分のもつと近くにくるよう招いておられるかもしれない、より気高い奉仕、はつきりと言つたら、司祭として完全に自分をささげて主に仕える奉仕者になるよう、君たちを呼んでおられるかもしれないのです。

以上のようなことを考えてみたことはありますか。君たちの家族や小教区、キリスト教社会全体にとって、司祭誕生がどれほど大きな恵みであるか、考えてみたことがあるでしょうか。

たしかに司祭への召しだしはだれもがこたえるべき義務ではありません。望むなら、イエズスはおおせになったからです。しかし、多くの若者たちは冒険を好むではありません。大勢の若人がすべてを投げうってイエズスに従い、イエズスの使命を引き継ぐことを私は確信しています。いずれにしても、君たちはそれぞれまじめな心で自分自身に問ひかけてみてください。いま君たちが果して侍者の役目は、主の呼びかけにこたえるための準備であるかもしれないからです。

(一九八〇年 四月九日 侍者たちへ)

『教皇様の声』ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月 十日発行 定価 一部六十円送料五十円 半分子約三百六十円送料三百円 一年子約七百二十円送料六百円(一部の送料で三部送付可能) 二十部以上一括購入なら送料不要

郵便替 振替 神戸 072393